慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	両大戦間のベルギー仏語文学 : 地域主義、方言文学、そして……
Sub Title	La littérature francophone belge de l'entre-deux-guerres : régionalisme, littératures dialectales et...
Author	宮林, 寛(Miyabayashi, Kan)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2012
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.103, (2012. 12) ,p.42(221)- 59(204)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	川口順二教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01030001-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

両大戦間のベルギー仏語文学

地域主義、方言文学、そして……

宮林　寛

ベルギー仏語文学にとって両大戦間は、自身の文化的アイデンティティを祖国に求められなくなった多くの作家がフランス文学への同化を模索した「遠心的段階[1]」として語られることが多い。これは19世紀末に、著名な弁護士で国内文芸の庇護者、また当時の論壇を代表する総合誌『現代芸術』の主催者でもあったエドモン・ピカールの言葉を借りるなら「ベルギーの魂」、すなわちラテン的なものとゲルマン的なものの共存という文化モデルが、もはや多方面の支持を得られなくなったことを意味する。発想と主題はゲルマン世界と親和性のあるフランドル地域に求め、表現媒体にはフランス語を用いる文学を、若き統一国家ベルギーの国民文学として成立させようとした19世紀後半の文学状況は崩れ、「フランス語によるベルギー文学」から「ベルギーのフランス文学」へと、ベルギー人作家の自己規定が大きく舵を切った時代が両大戦間だったのである。

両大戦間は行政、司法、軍組織に続いて、初等・中等教育の現場でも属地主義にもとづく単一言語使用が義務化された時期でもある。地理的にはオランダ語圏に属しながら18世紀初頭からフランス文化が根づいていたため、教育現場での言語選択に属人主義を残した首都ブリュッセルを除くと、国の北部ではオランダ語、南部ワロン地域ではフランス語が、それぞれ学校教育に用いられる唯一の言語となった。これは、フランドル地域とワロン地域の人口がほぼ同数として、文学者予備軍を含む児童生徒のう

ち、長じてフランス語を表現の手段に選ぶであろう者が半減することを意味する。1880年代初頭から第一次世界大戦勃発までの「フランス語によるベルギー文学」を支え、全ヨーロッパに認知された象徴派詩人の大半がフランドル地域の上層ブルジョワジーの家庭に生まれ、フランス語で教育を受けたばかりか、シャルル・ヴァン・レルベルグやマックス・エルスカンプのようにオランダ語をまったく解さず、創作でも普段の生活でもフランス語に頼りきりだった者も少なくないことを思えば、両大戦間に進行しつつあった言語環境の変化が仏語文学にとってどれほど深刻な事態であったか、あらためて説明するまでもないだろう。この点できわめて象徴的な出来事は、1911年のノーベル文学賞受賞者モーリス・マーテルランクや、『死都ブリュージュ』で有名な詩人ジョルジュ・ローデンバックも学んだヘント大学が、全教育課程で使用言語をフランス語からオランダ語に切り替えた1930年の大学改革である。また一つ要求を通したフランドル民族主義運動の勝利が、フランス語話者の目には新たな凋落の兆しとして映じたであろうことは想像に難くない。

その一方で両大戦間は、前世紀に文芸誌『若きベルギー』（1881 − 1897）の主導で進行した国民文学成立の流れを引き継ぎ、制度面でその補強がはかられた時期でもある。1920年8月19日、国王アルベール一世の王令によって、第一次世界大戦後の挙国一致内閣はベルギー王立フランス語フランス文学アカデミー（以下王立アカデミーと略記[2]）を創設した。会員の総数はアカデミー・フランセーズと同じ40名。文部科学大臣ジュール・デストレが選んだ創立メンバー 14名と、この14名によって選ばれた残り26名には直接、間接に『若きベルギー』とかかわった前歴をもつ文学者が多かった。基本方針に「自分たちらしくあること」を掲げた点からも明らかなように、『若きベルギー』は国民文学運動の中心に位置づけられる雑誌であり、とりわけ三人のG（Iwan Gilkin ; Albert Giraud ; Valère Gille）が主導権をにぎったことへの反発から社会派の作家や、マーテルランクら象徴派系の寄稿者が去った後は、グループの総意として高踏派以外の美学を認めず、破綻のない古典的なフランス語を擁護する方向に進んだという経緯

がある。そのような文学集団の有力メンバーであった以上、言語環境について間違いなく守旧的な立場をとるだろうと予想される王立アカデミー会員の選出は、母語の地位が脅かされる状況に気をもむフランス語話者の期待に応えるものだったろうし、また実際、ヘント大学からのフランス語追放に関しても、フランス語の地位保全をみずからの使命と心得る王立アカデミーはオランダ語の強制に対して明白な反対の姿勢を打ち出したのだった。

しかし、ここで特に注目しておきたいのは、王立アカデミーの創立メンバーに地域主義文学の代表的作家ユベール・クラン（1862 − 1934）が名を連ねていることだ。隣国フランスでも、地域主義的傾向の強い文学者であるマルセル・パニョルとモーリス・ジュヌヴォワがアカデミー会員に選出された例があるにはあるが、これはむしろ例外であって、作品世界が一地方の風物と分かちがたく結びついた作家と、国内外におけるフランス語の普遍的地位を、いわば最終審級において保障する強国の文化機構とは本来相容れない。設立の目的として世界におけるフランス語の顕揚を謳う王立アカデミーもまた、国際社会で通用するフランス語に普遍的な価値を認めている点でアカデミー・フランセーズと変わらず、地域主義と正反対の極に位置づけられる組織である。にもかかわらずユベール・クランはアカデミー会員に選ばれた。それも創立メンバーとして。文化大国フランスの、きわめて中央集権的な機構であるアカデミー・フランセーズとの差異化を図ったのだろうか。そのように考えたくなるのは、王立アカデミーの生みの親ジュール・デストレが国王に宛てた1919年の報告書に「アカデミーはかくも味わい深く、かくも生命に満ちあふれた数多のワロン方言に関心をいだかないわけにはいかないのであります[3]」と記し、地域文化擁護の姿勢を鮮明に打ち出していたからである。

*

作家ユベール・クランが活躍した時代は地域主義小説の最盛期に当たる。19世紀末から20世紀前半にかけてのヨーロッパには、フランス語圏だ

けに限っても、実に多くの地域主義作家があらわれているのだ。オーヴェルニュ地方を描いたアンリ・プーラ。フランス語圏スイスの文豪シャルル＝フェルディナン・ラミュ。少し時代が下るとプロヴァンス地方のジャン・ジオノとアンリ・ボスコ。社会的な認知度からいうと両大戦間は特に賑やかで、たとえばポワトゥ地方に取材した小説『眠れる沼』でエルネスト・ペロションが1920年のゴンクール賞に輝いているし、その5年後にはモーリス・ジュヌヴォワが、ソローニュ地方の森を作品の舞台にした『ラボリオ』で同じくゴンクール賞を受賞するなど、土俗的な主題をあつかった小説が確かな評価を受け、多数の読者を獲得している。このような地域主義文学の隆盛は、工業化の進展と、それにともなう社会変容への反動にその一因があると見るのが妥当な線だろう。20世紀初頭にベルギーの国民詩人と目されていたエミール・ヴェラーレンの題名を借りるなら、「触手ある都会」が地方から労働力を吸い寄せるのにともなって空洞化する農村部に目を向け、消えゆく昔ながらの暮らしを哀惜したり、地域共同体の崩壊を冷徹な目で描いたりするところに、この時代の地域主義小説は生まれたと思われるからである。

特定地域の風土、習俗を描くことに力点を置く地域主義文学は、表現媒体の幅が広い。地域の文化的特性を如実に反映する言葉を最優先し、全編で方言を用いた作品もあれば（南仏プロヴァンスで活動した文学結社フェリブリージュの仕事がこれに相当する）、元来書き言葉をもたない俚言の文章化が必ずしも文体的効果をあげるとはかぎらないと考え、作品の舞台こそ特定地域に限定しながら、表現媒体には標準的な国語を用いた作品もあるのだ。ユベール・クランの場合は後者に相当する。ベルギー東部、ムーズ川に沿ったエスバイ地方で物語が展開する代表作『黒いパン』（単行本は1904年刊）は方言による会話もなければ、地域の風物に根差したワロン語の特有表現もなく、シンプルで抑制のきいたフランス語で、時代の流れに取り残された夫婦の悲劇を淡々と語った佳作である。学校の授業で習うフランス語のようだとも評されるユベール・クランの文章が、数多ある地域主義小説のなかでも群を抜く簡潔さを示し、文体のゼロ次元に接近してい

ることは、国内の一地域に特化した物語を語っていながら、その物語が伝える人間のドラマそのものは普遍の相のもとに置くという決断のあらわれだろう。

言語選択の振り子が大きく逆向きに振れると、方言文学が生まれるが、ベルギー南部はまさに方言文学の宝庫だ[4]。ワロン語と総称されるさまざまな地域語を用いた文学は、16世紀末から17世紀初頭にかけての時期に生まれ、18世紀に休眠状態に陥った後、ロマン主義美学がヨーロッパ諸国を席巻した1830年前後に華々しく復活をとげ、19世紀末に二度目の隆盛期を迎える。同じオイル語文化圏で、まさしく同じ時期に（16世紀末～ 17世紀初頭）あらわれたピカルディー地方やロレーヌ地方の方言文学が文学地理上の一大勢力となることはなかったのに対し、ワロン文学の伝統が途切れることなく現在まで続いたのは、中央集権国家フランスと違い、ベルギーにはパリに比肩しうる絶対の文化的中心がなかったことも大きく関係しているだろうが、とりあえずここで注目しておきたいのは、フランス文学とベルギー仏語文学も加えた三者関係の枠内で、ワロン文学が占める位置の特異性である。

方言文学がロマン主義の時代に再浮上してきたことに、どのような意味があるだろうか。19世紀は国民文学の観念が幅をきかせた時代である。国民文学は国民国家の成員が自身の文化的帰属を確認するために欠くことのできない要素の一つである。大多数の国民に祖国の文化伝統への帰属を納得させるには、遠く歴史の闇に起源をもつ（と思われる）民衆文化に訴えるのが早道である。民衆の生活から生まれた文化伝統は民族の精髄に根差し、その自発的表現たりえているという発想が、そこにはある。方言文学は、そうした民俗的なるものへの関心の一環で評価を受け、利用された。しかしその一方で方言文学は、国民文学が国内では国民統合を助け、対外的には国の文化的威信を示すのと違って、あくまでも二次的文学の地位にとどまり、標準化した国語と、地域横断的な規範をもたない俚言とのあいだに埋めようのない溝が横たわっていることを証拠づける資料でもある。つまりフランス語圏ベルギーに限って言うなら、表現媒体に方言を選んだ

ワロン文学は、パリの文壇から見てすでに従属的な位置にあるベルギー仏語文学よりも、さらに文化的正統性が希薄な事象として、パリからいわば二重の距離によって隔てられた文学と見られがちなのである。

ところが実際のところ、ひとりワロン文学に限らず、方言文学は民衆の手によって生み出された民俗的事象ではない。匿名のまま流通したため著者の名が残らなかった文書もたしかに存在するが、ワロン文学の作品には特定の作者がいるのだ。アンシアン・レジーム期には教会や法曹界の識者が方言文学の生産者だったし、20 世紀に入ると大学で文献学や方言学を講じる学究が方言文学の実作者を兼ねる場合も見受けられる。つまり方言以外の言葉を知らないから方言で書くのではなく、媒介言語には標準化された国語を、創作には地域限定の方言を用いるという選択的二言語使用の状況を生きるのが方言文学の作家なのである。しかもワロン文学の場合、標準的なフランス語との懸隔が大きいため、一個独立した言語による創作と認められやすく、1856 年には早くもワロン語ワロン文学協会が発足している。ワロン文学は断じてベルギー仏語文学の下位範疇などではなく、独自の表現媒体をもち、制度面でも確立した一個の文学として、ベルギー国内で仏語文学と共存しているのだ。一人の作者がワロン文学とベルギー仏語文学の双方に手を染めることは稀で、方言詩人フランツ・ドゥワンドラール（1909 − 1952）のようにフランス語の著述を残した例もあるにはあるが、その場合でもジャンルや主題に応じた言語の使い分けは厳格に守られており、ワロン文学と仏語文学が別物であることを、かえって強調する結果となっている。

*

地域主義文学の類型を考える場合、すべて標準フランス語で書かれた作品が一方にあるとすれば、この傾向を代表する作家がユベール・クランであることは衆目の一致するところだが、もう一方の極、すなわち全面的に方言を採用した作品はベルギー仏語文学には存在しない。ワロン文学は仏語文学の外にあって、一つの自律的システムを形成しているため、仏語文

学との一体化は原理的に不可能だからである。それでもなおユベール・クランと正反対の極を、全編に方言を用いた作品が占めると仮定するならば、実際に書かれた地域主義文学の作品は標準フランス語への全面的依拠と、方言の全面的採用とのあいだを揺れると考えることができる。作品に占める方言の割合が大きくなればなるほど、当該の方言を解さない読者にとって作品の理解は困難になる。そこで当然、方言から借用した単語や言い回しを本文中でフランス語に言い換えたり、脚注や後注の形で解説したりする必要が生じてくる。物語の進行を遅らせかねないパラフレーズや、読書行為の流れを一時的に中断するパラテクストの挿入を避けたければ、ユベール・クランのように方言の要素を排除する方向に進むだろうし、方言を多用するならば、一般読者の理解を助ける必要から、文章表現におのずと教育的配慮が宿ることになるだろう。

そうした配慮を強く感じさせる書き手に、モーリス・デ・ゾンビオー（1868 − 1943）がいる。地域主義小説の他に『新版ブルゴーニュワイン愛好家必携』（1921 年）や『ハバナ葉巻概論』（1926 年）といった美食、嗜好品に関する指南書で知られた著述家だけあって、方言の導入に関しても用意周到である。たとえば小説の代表作『モーグレ』（1911 年）で、ベルギー南西部トゥルネ近郊の農村地帯に 20 世紀半ばまで残っていた「モーグレ（maugré）」なる土俗的慣習[5]を語りながら、本文中にピカルディー方言をちりばめているのだが、五つの鐘楼をもつノートルダム大聖堂に言及する際、いっさい説明を加えることなく引かれた語群 « *choncq clotiers*[6] » も、二度、三度と登場するうちに « *choncq clotiers* de Notre-Dame[7] »、« Notre-Dame avec ses chonq[*sic*] clotiers[8] » といった具合に補足情報を加え、注に頼らずとも « choncq » はフランス語の « cinq » に、« clotiers » は « clochers » に対応することを読者が悟るように工夫をほどこしている。この場合の読者は、ある土地を訪れるまで知る由もなかった旧跡に遭遇し、少しずつその来歴を学んでいく旅人に似てはいないだろうか。

土地の名所旧跡を登場させる地域主義文学には、確実に御国自慢の要素が含まれている。トゥルネのノートルダム大聖堂に何度も言及し、その外

観や内部の様子を詳細に描写した『モーグレ』もその一例だが、フランス語圏ベルギーに地域主義文学の種を蒔いた先駆者の一人、マルセラン・ラ・ガルド（1818 − 1889）が、すでに物語と土地の関係を創作の基盤に据えていた。ラ・ガルドといえばアルデンヌ地方に取材した短編集『アンブレーヴ渓谷 ── アルデンヌの昔話と景観』（1858）、『サルム渓谷の昔話と景観』（1865）の二作によって、土地に密着した怪異譚の流行を生んだ人物である。「マクラル［= ワロン語で「魔女」］」の野原」、「狼の泉」、あるいは「赤い男の牧場」など、怖いもの見たさに訴える地名を物語の起点に置き、その由来を魔女や鬼火やベルゼブルの化身がからむ怪異譚によって説明する作品集は、虚実半ばする国内旅行記の流行[9]ともおそらくは歩調を合わせ、アルデンヌ地方の川に沿った巨岩や大木に地図の上で印をつけるような手つきで、読者にとっては旅の追体験となる地名の物語を紡いだのだった。読書による、自宅にいながらにしての観光。程度の差はあるにしても、地域主義小説には必ず、こうした娯楽の面を認めることができる。

*

では、方言の局所的使用によって旅情をそそり、そこに一種のエキゾチシズムが醸成される平均的な地域主義小説ではないし、方言文学とも一線を画していながら、特定地域の言語的事象に正面から取り組んだ仏語文学の作品は存在しないのだろうか。実は1923年に著者名を伏せて刊行された後、何度も版を重ね、今では古典の一つに数えられるまでになった特異な作品がある。ロジェ・ケルヴァン・ド・マルク・テン・ドリッシュ作『ピチェ・スクラムィユの寓話』（以下『寓話』と略記）がそれで、語彙の面でも、統辞法のレベルでも多言語都市ブリュッセルの下町マロル地区の話し言葉を模した、マロル弁の書き言葉ともいうべき表現を完成させた奇書である。『寓話』の文体的特徴がよくあらわれた一節を、まずは原文で引いてみよう。

Tichke dans l’ jardin de s’ monpère

Promenait sur in beau matin①
On l'avait dit : « Te peuïe ça faire②,
Mo te peuïe pas toucheïe à rien[10]. »

フランス語のようでありながら、フランス語ではない表現を満載した文章である。所有形容詞と名詞を一体化したばかりか（« monpère »）、さらに新たな所有形容詞が加わって冗語になっているのも（« s' monpère »）、標準フランス語とは異なる発音をそのまま表記しているのも（« te peuïe pas toucheïe à rien »）、マロル地区で通用する話し言葉の再現を目指した結果だろう。また、不定冠詞 « un » を « in » とつづるのはワロン語の特徴であり、人名に接尾辞 « -ke » を加えて愛称とするのはオランダ語の慣用である（ « Tichke »）。さらに、語形そのものはフランス語と同じであるため見落とされがちだが、引用文中で下線をほどこした箇所はオランダ語の語順に倣い、オランダ語から直訳した折衷的な表現だ（① ← « op een mooie morgen » ② ← « mag dat doen »[11]）。わずか四行の引用に、標準フランス語からの逸脱を示す用例がこれだけ詰め込まれているところからも明らかなように、『寓話』は全編がフランス語とワロン語、そしてオランダ語による言葉の混合体として成立した例外的な作品なのである。

すると『寓話』は、多言語都市ブリュッセルの市域でも特に言語環境が複雑なマロル地区と分かちがたく結びつく点で、地域的にそれなりの広がりをもつ方言文学よりも、さらにローカルな文学的事象なのだろうか。たしかに『寓話』が国境を越えることはないだろう。しかし、フランス語と方言の混用だけでなく、オランダ語とフランス語の相互浸透すら表現の手段として取り込んだ『寓話』は、両大戦間のベルギー国内事情に照らすと、意外な政治的主張を宿し、普遍への志向に貫かれた著作であることがわかってくるのだ。フランドル民族主義の高揚にともなって司法、軍、教育の場でオランダ語の使用が認められるようになったことは、すでに述べた。そうした変化は、1830年の建国以来、自分たちの専権事項であったはずの分野が、次から次へとオランダ語に浸食されていくプロセスとして、フラン

ス語話者の目には映じていただろう。フランス語圏であるワロン地域はもちろん、オランダ語圏のフランドル地域でも社会上層部の家庭は当然のようにフランス語で子弟を育て、それを羨望の眼差しで見つめる中流家庭も教育の言語にフランス語を選んだため、オランダ語に対する階層的優位を保障されたフランス語は、ベルギーが統一国家でありつづけるために不可欠な装置として機能してきたのだった。したがってフランス語が国土の北半分で後退を余儀なくされるというベルギー国内の情勢は、それまでフランス語で創作をおこなうことが当たり前だった文学者に言語の選択と、文化的帰属をめぐる厳しい問いを突きつけることになる。ベルギー仏語文学の担い手が総じてフランス文学への同化を目指すようになったことはすでに述べたが、フランドル地域に生まれ育ちながら、文章表現にはフランス語を用いる文学者の場合、事態はそれほど単純ではない。フランス語およびフランス文化への全面的帰属を主張し、フランドル民族主義者の側から敵意を込めて「フランスキヨン」と呼ばれた人たちはいざ知らず（彼らはフランス語以外の言葉を解さない単一言語使用者である）、オランダ語とフランス語をともに使いこなすバイリンガル作家は、使用言語の選択を正当化する以前に、そもそも自分はいずれの文化伝統に連なろうとしているのかということを、厳しく自問しなければならないのだ。

『寓話』の作者は、そうしたバイリンガル作家の一人である。フランドルの古都ヘントで、「従僕や小間使が主人に話しかけるときは三人称を[12]」用いるという名門貴族の家に生まれたロジェ・ケルヴァン・ド・マルク・テン・ドリッシュ（1896 – 1965、以下ロジェ・ケルヴァンと略記）は、カトリックの信仰に篤く、統一国家ベルギーに対しても強い愛国心を抱く保守派の知識人だった。七歳でブリュッセルに移り住むと、学校の行き帰りにマロル地区の風物と親しく接し、これが後に『寓話』を書く遠因になったであろうことは想像に難くないが、忘れてはならないのはロジェ・ケルヴァンがマロル弁のネイティヴではなく、『寓話』の言葉は意図的に作られた文章語であるということだ。マロル地区では「誰もピチェ・スクラムィユのような話し方はしない ── 少なくとも立て続けにあのような言葉を吐

く者はいない[13]」とロジェ・ケルヴァン当人が釘を刺しているとおり、『寓話』の狙いは御国言葉を通じてマロル地区の人々と親睦を深めることではない。そもそも『寓話』は寓話の形を借りているからこそ意味をもつ作品である。市井の民を巻き込む騒動と、その結末を物語ることによって、時と場所を超えた処世訓を導くのが寓話なるものの最大公約数的な特徴であるとしたら、ロジェ・ケルヴァンの『寓話』もまた、限られた街区の住民に、その土地の言葉で人生のさまざまな局面を演じさせる点で、きわめてローカルな舞台設定となっているにもかかわらず、結果的には普遍の知恵を語ることに成功している。さらに『寓話』に収められた話の大半が韻文によるものであることを考え合わせるなら、ロジェ・ケルヴァンが手本にした文学者の名を、あえて記すまでもないだろう。作者名をあげるまでもなく、『寓話』の本文が偉大な先達とのつながりを明示的に示しているからである。「猿とイルカ」や「ツグミと鶏」は、前者がラ・フォンテーヌの手になる同名の寓話詩を、後者は同じくラ・フォンテーヌの「孔雀の羽根をつけたカラス」を、それぞれ換骨奪胎した作品である。小学生の頃、国語の授業で暗唱させられたラ・フォンテーヌの寓話詩ほど、フランス語話者の記憶に滲みついた文学作品は他にないだろう。学校教育の場で流麗なフランス語の見本として用いられるうちに、寓話詩はフランス語話者の文化的帰属を保障する要因の一つとなった。そのような文化遺産を間テクストとして成立した『寓話』が、見かけとは裏腹に普遍への希求を宿していたとしても、決して不思議ではないのだ。

もっとも、ロジェ・ケルヴァンの普遍が国内に限定されるものであることは認めておかなければならない。やがて「言語戦争」とまで呼ばれることになるオランダ語話者とフランス語話者の対立が、いよいよ激しさを増してきた時代である。使用言語をめぐる争いが国の根幹を揺るがしかねない政治問題にまで発展し、フランス語話者とオランダ語話者の相互不信を増幅する様を前にすれば、守旧派のロジェ・ケルヴァンならずともベルギー王国の行く末を案じる向きは当然あっただろう。そんななかオランダ語にも、フランス語にも等しく通じたバイリンガル作家が、対立しあう両

言語を止揚した先に、統一国家存続の道をさぐったとしても、それはむしろ当然の反応ではないだろうか。実際、『寓話』初版に付された序文には庶民的な物言いを模した文体でフランドル地域の人間も、ワロン地域の人間もマロル弁を話してはどうか、マロル弁こそ真のベルギー語なのだから、かならずや相互の理解を助けるはずだ[14]、と言明する文を読むことができるのだ。『寓話』は滑稽と誇張を持ち味とする戯文である。マロル弁の国語化などという、どの方面からも相手にされそうにない提案を額面通りに受けとる必要はない。それでもなお、ベルギー語の創出という非現実的な企てを虚構の世界で実践してみせる『寓話』に込められた願いの一つが、国内で通用する二言語の対立が激化するにつれて等閑視されはじめたナショナル・アイデンティティの問題に、せめて関心を向けてもらうことであったのは、まず間違いないだろう。ロジェ・ケルヴァンは優れた翻訳者でもあった。フランドル地域に生まれたオランダ語による同時代文学を有力な総合誌の文芸欄で逸早く紹介し、原著者と緊密に連携をとりながら仏訳するなど、オランダ語文化圏とフランス語文化圏の橋渡しを買って出た、いわば「国内限定」の国際派だったのである。

*

ワロン地域に深く根を下ろし、さまざまなスピーチレベルの混在によって独自の語りを実現した作品に、マルセル・レミ（1865 − 1906）の『ふるさとの人たち』がある。執筆の時期は1900年代初頭にさかのぼるが、日刊紙『リエージュ新報』に掲載された総数21の物語は、遺著として一冊にまとめられたのが1926年、『ピチェ・スクラムィユの寓話』と同時期である。特に注目すべきなのは「ぼくが子供だった頃」の総題をもつ16編の戯文で、「もうすぐ七歳になる[15]」少年を語り手に据え、19世紀末にリエージュ近郊の農村地帯で暮らした人々の営みを描いているのだが、100パーセント方言による会話から、子供の口調を模した本文をへて、出版物の一部をそのまま抜き書きした「正しい」フランス語にいたるまで、社会階層によって変化する話し言葉の姿を残らず拾いあげる徹底ぶりは、まさに言

葉の標本集と呼ぶにふさわしい。少年の暮らす農園では大叔父と大叔母が主として方言を用いているのに対し、すぐ近くに居を構える叔母は年端もゆかぬ甥にさえフランス語で話しかけ、そこに二つの家庭をへだてる階層の違いが浮かび上がる。村長が気取った標準フランス語を話すことで自身の社会的地位を誇示するかと思えば、ドイツ出身の助任司祭は思わず噴き出したくなるほど滑稽なドイツ語なまりのフランス語で怒鳴りちらす。文盲の女中は恋文の代筆を、あろうことか主人公の少年に頼み、大叔父夫婦はフランス語の発音をめぐる諍いから、フランス語の知識があやふやであることを、みずから白日のもとにさらしてしまう。

> —« Après s'être mesurés du regard, les deux champions··· »
>
> —Tchâpions, dit mon oncle, *qwè èst-ce don çoula ! C'è-st-è walon çoula. Vos polez bin dîre tchâpignongs, dji comprin bin l'francès.*
>
> —*Awè, ci deût èsse ine fâte di l'imprîmeû*, répond ma tante qui recommence à lire :
>
> —« Après s'être mesurés du regard, les deux champignons en vinrent aux mains, et leur fureur bientôt ne connut plus de bornes[16]. »

これは夕食後の場面で、後の時代ならさしずめラジオかテレビの放送を楽しむ小市民の団欒といったところだが、連載小説を音読する妻を夫がさえぎって、ある単語の発音がおかしいと文句をつければ、妻は妻で間違ったのは誤植のせいだと責任を転嫁することで、どうにか体面を保とうとする。その結果、小説の主人公たる「つわもの（champions）」二人は「マッシュルーム（champignons）」に化けてしまったわけだが、もちろん誤植があったわけでも、発音が間違っていたわけでもない。大叔父も大叔母もフランス語の理解が不十分であるがために、正しいフランス語を正しくないと思い込んだだけなのだ。

語り手と作者の混同は厳に慎まなければならないが、「ぼくが子供だった頃」の第一話は、七歳に満たない少年が書き言葉について一家言を吐く

ところから始まっている。「読む」という一点をめぐって大人を自分と同列にあつかい、小学生も社会人も読解力に根本的な差はないと断じる稚拙な論法は、語り手の「子供らしさ」を強調するための演出ではあるだろう。しかし多層的な言葉の世界に誘う作品であってみれば、少年の口を借りて語られる社会言語学的な観察が冒頭に置かれた意義はきわめて大きく、ある地域共同体に生起する言語的事象を細大漏らさず記録しようとする作者の決意と矜持を、ここに読みとることも十分に可能なのだ。

> Et voilà que j'ai presque sept ans ; et que je sais lire. Pas tout ; pas les mots trop longs et les trop difficiles qu'on ne sait pas ce que ça veut dire. D'abord moi, je crois que personne ne sait lire et que quand on regarde dans un livre ou bien sur la gazette on fait semblant, mais on devine tous ces mots-là qu'on a déjà entendus autre part. Comme je suis petit et qu'on m'empêche d'écouter tout, c'est pour ça que je ne sais pas fort bien lire[17].

子供はもちろん、大人も本や新聞のフランス語は読めない。話し言葉から類推することで、書いてあることがわかったふりをしているだけだ。大人と違って聞いてはならないことの多い子供は読む力が劣って当然だ、とは理不尽な仕打ちに納得がいかない少年の、素直といえば素直な感想である。それでも「つわもの」を「マッシュルーム」と混同した大叔父夫婦のエピソードが語るのは、ここで指摘されたとおりの「知ったかぶり」が招いた失策であり、その意味で「ぼくが子供だった頃」の冒頭部分は言語観察のフィールドワークに先立つ理論として理解すべきかと思われるのである。

『ふるさとの人たち』の世界で、あらゆる言語的事象に接し、それを記録するのは語り手の少年だ。虚構であるからこそ可能な人物設定にはちがいないが、時代背景を考慮に入れるなら、利発な小学生が言葉のエキスパートとしてふるまうことは、かならずしも現実を無視した絵空事ではない。物語が展開する 19 世紀末はもちろん、第一次世界大戦後もしばらくのあ

いだ、生活圏が農村部に限られた小作人や小規模土地所有者はもっぱら方言で意思の疎通をはかり、フランス語は行政への対応に用いる余所行きの言葉か、学校における知識伝達の道具にすぎなかった。使用頻度の低いフランス語であってみれば、当然ながら方言から標準語への切り替えが円滑であろうはずもなく、そこに生成するのはフランス語にワロン語の語彙や、特異表現を混在させた、フランス語であってフランス語ではない文である。話し言葉特有の冗語的表現が多いのも（たとえば関係代名詞の重複« où que[18] »）、耳で聞いただけでは気づかないが、ひとたび文字にすればすぐにそれとわかる動詞活用の誤りが認められるのも（« je ris » であるべきところを « je rie[19] »）、付加形容詞をことごとく前置するのも（« des laides sales gens[20] »、« une belle petite carrée plate boîte[21] »）、すべてワロン語とフランス語の接触に由来する現象である。書き取りの試験がクラスで二番だったと自慢する少年[22]は、そうした中間的言語で物語を語りながら、同時に言葉をめぐる大人たちのふるまいを、いわばメタレベルから観察し、時に批評を加えている。フランス語を使いこなす能力はまだ未完成ではあるが、小さな村落共同体のなかで、あらゆる言語的事象を一手に引き受けて管理する少年は、大人と違って学校のフランス語に親しむことによって、農業労働者や文盲の女中よりも優越した位置に立っているのだ。マルセル・レミが描いてみせたのは、そうした混合的な言語生活が営まれた一地域の生活であり、フランス語とワロン語双方の特徴を呈しながら、いずれか一つには還元されない言語が生まれた環境に読者を立ち会わせることこそ、『ふるさとの人たち』の狙いだったのである。

*

ベルギー仏語文学にも、方言文学にも分類しきれない特殊な作品を、首都ブリュッセルとワロン地域から一編ずつ紹介したが、紙幅の関係でフランドル地域の例をあげることはできなかった。南部オランダ語を介してのみ実感される風物を、フランドル民族主義が高揚した両大戦間においてもなお、オランダ語ではなく、フランス語で表現しようとした文学者はどの

ような問題に直面し、どのようにしてその解決をはかったのだろうか。系統を異にする二言語のはざまにあって、フランス語で書くことが、長らく親しんだ文化伝統からの離脱に直結しかねない彼らの立場については、また別の機会に論じることとしたい。

注

1　1981年にジャン＝マリ・クリンケンベルグが用いて以来、ベルギー仏語文学史の記述に必ず登場する用語。最初、雑誌『文学』の論文で「遠心的段階」と呼んだ時期を、後にクリンケンベルグは、パリを中心に据えた場合にベルギーは周縁に位置づけられることから、フランス文学との関係に特化してベルギー仏語文学をとらえるために修正をほどこし、「求心的段階」と命名し直している。しかし、すでに多くの研究者が当初の用語法を採用しているうえ、ベルギーの仏語文学をパリとの関係だけで考えると、国内に厳然と存在するオランダ語およびオランダ語文学との関係を度外視することにもなりかねないので、ここでは1981年の用語法を踏襲する。Cf. Jean-Marie Klinkenberg, « La production littéraire en Belgique francophone : esquisse d'une sociologie historique », in *Littérature*, n° 44, 1981 ; Benoît Denis, Jean-Marie Klinkenberg, *La littérature belge : précis d'histoire sociale*, Loverval, Labor, « Espace Nord », 2005.

2　総勢40名の会員からなり、国際社会におけるフランス語の顕揚を目標にかかげているなど、アカデミー・フランセーズを意識した機構であることは否定しようもないが、会員のうち3分の2を創作者が、残りの3分の1を文献学、言語学、文学史等の研究者が占め、加えて40名中10名はベルギー以外のフランス語圏諸国から選出するなど、制度的硬直を避けるための工夫が、創立当初からほどこされていたことは特筆すべきだろう。また、1980年にマルグリット・ユルスナールを会員に加えるまで、200年以上の長きにわたって女性に門戸を閉ざしてきたアカデミー・フランセーズと違い、ベルギー王立アカデミーは発足当初から女性を会員に迎えている。

3　Jules Destrée, « Rapport au roi », http://www.arllfb.be/organisation/rapport.html.

4　フランス語圏ベルギーの方言文学についてはモーリス・ピロンの著述を参照。Cf. Maurice Piron, *Les Lettres wallonnes contemporaines*, 2e

édition, Tournai/Paris, Casterman, 1944 ; Maurice Piron, « Les littératures dialectales du domaine d'Oïl : le cadre géographique et historique », in Raymond Queneau (dir.), *Histoire des littératures III : littératures françaises, connexes et marginales*, Paris, Gallimard, « Encyclopédie de la Pléiade », 1958.

5 分益小作人が「意に反して (de mauvais gré)」土地を追われ、その土地に新たな小作人が入ったとき、追われた小作人と、周辺の農民たちが結託して新参者に対しておこなう復讐の数々を「モーグレ (maugré)」と呼ぶ。

6 Maurice des Ombiaux, *Le Maugré* ; préface de Paul André ; lecture de Michel Voiturier, Bruxelles, Labor, « Espace Nord », 1986, p. 45.

7 *Ibid*., p. 142.

8 *Ibid*., p. 157.

9 興味深い作品に『アルフレッド・ニコラ氏の旅と冒険』がある。法律家フランソワ＝ジョゼフ・グランガニャージュが偽名で発表した『アルフレッド・ニコラ氏……』のシリーズは1835年の第1巻から1876年の最終巻まで、長きにわたって支持された異色の旅行記である。Cf. Justin*** [=François-Joseph Grandgagnage], *Voyages et aventures de M. Alfred Nicolas au royaume de Belgique*, 2 vol. ; *Le Congrès de Spa. Nouveaux voyages et aventures...*, 5 vol. ; *La vie champêtre ; La vie urbaine ; Les nouveaux loisirs de M. Alfred Nicolas*, 3 vol., Bruxelles, puis Liège, Leroux, 1835-1876.

10 Roger Kervyn de Marcke ten Driessche, *Les fables de Pitje Schramouille* ; préface de Jacques De Decker ; lecture de Reine Meylaerts, Bruxelles, Labor, « Espace Nord », 1999, p. 7.

11 Cf. Reine Meylaerts, « Lecture », in Roger Kervyn de Marcke ten Driessche, *Les fables de Pitje Schramouille* ; préface de Jacques De Decker ; lecture de Reine Meylaerts, Bruxelles, Labor, « Espace Nord », 1999, p. 126.

12 Roger Kervyn de Marcke ten Driessche, *Le balancier des routines*, Bruxelles, Le Rond Point, 1954, p. 26.

13 Roger Kervyn de Marcke ten Driessche, *L'autopsie de Pitje Schramouille*, Bruxelles, De Visscher, 1948, p. 11.

14 « FLAMANDS, WALLONS / C'EST TERTOUS DES COCHONS / [...] / Si on s'arrangerait ensemble pou parler marollien. – Ça est d'vrai Belche et on s'attaândrait. » – citation d'après Reine Meylaerts, « Lecture », in Roger Kervyn de Marcke ten Driessche, *Les fables de Pitje Schramouille* ; préface de Jacques De Decker ; lecture de Reine Meylaerts, Bruxelles, Labor, « Espace Nord », 1999, pp. 127-128.

15 Marcel Remy, *Les ceux de chez nous*, édition établie par Benoît Dorthu sous la direction de Jean-Marie Pierret ; lecture de Louis Chalon, Bruxelles, Labor, « Espace Nord », 1997, p. 37.　作品集の題は著者がつけたのではなく、単行本化に際して編者が選んだもののようだが、題名の選択としてこれは正しかったと思われる。フランス語では指示代名詞に定冠詞をつけることはないので 、ふつうに考えれば « Ceux de chez nous » となるし、リエージュ近郊で通用するワロン語なら « Lès cis d'amon nos-ôtes » と表記するだろうから、« Les ceux de chez nous » は標準語と方言の双方の特質を帯びながら、そのどちらとも完全には一致することがない。本作の特質を言い当てた秀逸な題である。

16 *Ibid*., p. 216.　ここで参照した校訂版はワロン語の会話について、フェレールの正書法にしたがう形で表記を統一しているが、1901年に発表されたばかりの正書法を、当時ベルリンに赴任中だった作者マルセル・レミが知ろうはずもなく、作品の初出時も、単行本再録時も、本文中のワロン語は表記に若干の乱れがあった。なお、引用中に « tante »、« oncle » とあるのは、それぞれ « grand-tante »、« grand-oncle » を縮めた略称である。

17 *Ibid*., p. 37.

18 *Ibid*., p. 272.

19 *Ibid*., *passim*.

20 *Ibid*., p. 221.

21 *Ibid*., p. 81.

22 *Ibid*., p. 165.